カメラスケッチ

1千支や富士山を描きました。2ケーブルテレビちゅピコムの番組『優男がゆく』の収録もありました。参加者全員で「おめでとう」3バラエティに富んだ絵や折り紙付きの年賀状。

12/26 SAT

地域のお年寄りに年賀状

玖波１丁目集会所

玖波１丁目の地域福祉グループの催しで、小・中学生たち12人が、年賀状作りに励みました。この催しは、学校の長期休暇の時期に、子どもたちと地域の人とのふれあいの場として、自治会や防犯団体、民生委員・児童委員などが協力して開催しているもので、夏休みには、そうめん流しなどを楽しんでいます。

冬休みの今回は、新年を迎えるにあたり、地域のおじいちゃん、おばあちゃんに年賀状を送ろうということで、大竹の手すき和紙で作ったはがきに、干支のうしや、人気アニメのキャラクターなど、思い思いの絵を描きました。折り紙を使った力作も見られます。

子どもたちが描く姿を見守る大谷喜作さん（玖波１）は、「子どもとふれあうことで、今の子どものことを知ることができます」と笑顔をのぞかせます。この催しも定着し、今では子どもたちから「いつあるの？」と聞いてくるそうです。

年賀状は、役員らの手で、地域のお年寄りのもとに届けられました。

良い年を願い 炎は天に

玖波小学校

無病息災などを願って正月飾りや書き初めなどを燃やす『とんど祭り』が行われました。校庭に竹や木材が高く組まれ、各家庭から持ち寄ったしめ飾りや、破魔矢などが周囲に置かれると、火の付いた稲わらで点火。「パンパン」と竹のはぜる音が鳴り響き、炎が一気に燃え上がります。

玖波地区自治会連合会会長の中村行六さん（玖波３）は、「例年は、ぜんざいなどを振る舞っていますが、今年は新型コロナの影響で飲食の提供はありません。安心してぜんざいが食べられるような年になればいいと願っています」と炎を見つめながら話してくれました。

鏡餅や餅を焼いて食べると、１年間健康だという言い伝えがあり、竹ざおに付けた網に餅を載せて焼く光景も見られました。

1/10 SUN

1とんどに火を付ける中村会長。2燃え盛る炎を見守る人たち。3「今年は良い年に」とばかりに勢いづく炎。4網に載せた鏡餅。5竹ざおで餅を焼く姿は、釣人のようにも見えます。

手描き鯉のぼりとの歩みをつづる

大石 雅子さん

表紙に描かれた緋鯉。手すき和紙の鯉のぼりを描き続けてきた大石雅子さん（88歳 元町４）の手によるものです。後継者もでき、平成30年に引退するまでの55年間、鯉のぼりづくりに携わってきた大石さんが、自らの歩みをつづった『手すき和紙 手描き鯉のぼり 五十五年間のあゆみ』を上梓されました。

大竹市のシンボルマークやキャラクターにもなり、市の代名詞ともいえるまでに愛されてきた手描き鯉のぼり。小瀬川流域で盛んだった伝統産業の手すき和紙を使った鯉のぼりは、最盛期には年間２千匹を描いていたといいます。しかし、時代の流れとともに生産量は減少。作り手も大石さん一人となってしまいました。

「仕事をやめて、和紙のこと、鯉のぼりのことを書き残しておこうと思いました」。しかし、引退した途端に病を患い入院。執筆中断を余儀なくされました。退院後、末の弟が「あんたの好きなように書きなさい」と背中を押してくれ再開。家事の合間に、こつこつと書き溜めていったノートは、文字でびっしりと埋められていました。

「思いつくまま書いたので、そのときの気持ちで、文章も文体も変わってしまいます。それを以前お世話になった県職員の方や弟など、周囲の方のアドバイスを受けて書き直していきました」。

そして、昨年12月ついに出版にこぎ着け、「お世話になった方々に贈ることができました」と、大石さんは安心した表情を見せます。少し疎遠になっていた方からも連絡があり、この本をきっかけに、改めて人とのつながりを実感したようです。

表紙に書かれたタイトルの「手すき和紙 手描き鯉のぼり」という文字。亡くなられたご主人の宏さんが、鯉のぼりの包装紙用に書かれた字だといいます。大石夫妻の文字と絵で飾られた本。鯉のぼりと共に歩んできた二人の歴史を感じさせてくれました。

この道ひとすじ

ひたすら好きな道を走ってきた

鍛治 美和子さん

図書館法施行70周年を記念して、地域における図書館活動を推進するため、多年にわたり図書館活動などの振興に顕著な功績のあった方などを表彰する文部科学大臣賞が、市立図書館の鍛治美和子館長（66歳）に贈られました。

鍛治館長は、昭和51年４月に県立図書館に就職。以来45年近く図書館業務一筋のベテラン。

「本が好きな子どもでした。小学校の図書委員を務め、貸し出しのはんこを押したりするのが楽しみでした。遊び半分だったのでしょう」。思わず笑みのこぼれる館長です。

将来は本に携わる仕事に就きたいと思い、司書の資格を取得しました。

図書館人生の中で一番の思い出は、大野町図書館（現廿日市市立はつかいち市民大野図書館）の立ち上げだといいます。旧大野町に派遣され、みんなで助け合いながら、一から積み上げていったことが、思い出深く残っているそうです。書棚一つにもこだわり、山形県天童市から取り寄せた特注品。おりしも阪神淡路大震災が起こり、運搬が危ぶまれたことも、今となっては思い出の一つ。しかし、その図書館も建て替えることになり、少し寂しげな表情をにじませる館長です。

市立図書館には、平成27年度から勤務しており、それまでになかったような催しの数々を企画。新たな風を吹かせています。

「大きな図書館では、担当が細かく分かれており、催しの企画も限定されていましたが、市立図書館では比較的自由な企画ができます」。小回りのきく規模ならではの良さを実感しているようです。

とりわけ評判だったのが、『国立国会図書館 歴史的音源を聴く』という催し。昨年はNHKの朝ドラのモデルになった古関裕而の作品を鑑賞しました。新型コロナの影響で開催できなかった『音読教室』も皆さんが楽しみにしている催しです。

「ひたすら好きな道を走ってきたラッキーな生き方」。これからもいろいろなことにトライする意欲をのぞかせる館長でした。